

山口益博士への弔辞

(昭和51年10月29日 於願照寺)

謹んで申し上げます。

先生は大正十三年四月より昭和三十九年三月まで、前後四十年に亘って大谷大学佛教学科に在任されました。その間、外国御留学その他のことよって四年ほどの中断がありますが、実に満三十五年の間、大きな力を私たち佛教学科の育成指導にお注ぎになりました。その上、御退任以後も名誉教授・講師としてさらに十年近く講義をお続け下さいました。

教室で先生が好んでご講じになったのは梵文中論釈であり、山口先生の授業といえ、その席に列なつた誰も思い浮かべるのがブラサンパダーの演習であります。それは戦前学生であった人々にとっては厳しく厳しく鍛えられた道場として忘れ難いものであり、先生晩年の学生たちにとっては師の積年の蘊蓄がおのずから流露するのを聴く愉しい場でありました。

先生はまた久しい間正規の課業の他に「輪読会」と称して週一回研究室に有志の学生を集め、難解な論書や西洋の学者の述作を講読されました。ボーディチャリヤーヴァターラとかヴィヤーキヤーユクティとかシルヴァン・レヴィの *L'Inde civihsatrice* とかいったものが取り上げられたあの集いの中でわれわれはより深い学問の世界に眼を開かれてゆきました。

こうして先生の許には学内外から熱心な聴講者が集まり、先生によって育てられた人々はまた学内外に散ってゆきました。こんにち私どもの佛教学科だけでなく他のいくつかの大学において、かつて先生の薫陶を受けた人々がその学風を伝えて活動しております。

思えば先生は先師佐々木月樵によつても高く掲げられた「佛敎を世界に」の精神を学の分野において実践され、先生流の仕方ですれを具現されました。その事を顧みて、私どもは今や、ややもすれば大谷大学佛教学科の上にも影を落しかねない固陋偏狭な宗派心や、*epigonat* な空気や、厳正さを失つてたるんだ研究ぶりを退けて、かつて先生の示された学問への気魄と同じものを、わが内にたぎらせるよう自らを策励せねばなりません。

いつの頃であつたか「外相ニソノイロヲアラハサス内心ニフカク他力ノ信心ヲ」という『御文』の言葉を口ずさまれた時の先生のお声を私は今も耳の底に留めております。

この世でのお別れに臨み長い間の御提撕を厚く御礼申し上げます。

大谷大学佛教学会

代表 櫻 部 建